

12回目から24回目までの3回にわたり、大口町の昔話を紹介します。

## 大口町の昔話③

# ろくん橋



▲六部橋

五条川にかかるとこの橋は、たんとあるが、きょうはな、おまえたちにもなじみ深い六部橋のいわれを語ろうかのう。

この橋は、「ろくんばし」といつてな、ずいぶんとむかし、この大口町がまんだ大久地といわれた時分のことじや。

そのころは、この五条川にも、ほんのかぞえるほどしか橋がかかってらなんだ。

田とさきの向こう岸にわたるにも、浅瀬を渡つていくが、なん時間もかかるて橋のあるところをまわつていいくかしたものだそな。

あるとき、しょ国を巡礼してきました六部が、この大久地にたどりついた。そして川岸にさしかかったのだが…。川はちょうど梅雨ごときで水かさが増え、上にも下にも渡れそうなどころは一ヵ所もない。

(これは困った。何としたもんか。)

しばらぐ思案をしておった六部は、

(この土地の人は、こりや難儀なことだらへ。

幸いわしは先を急ぐわけではないし、まして仏に仕える身。なんとかみんなの難儀が救えんものか。)と、考えついたのが橋をかけることであった。

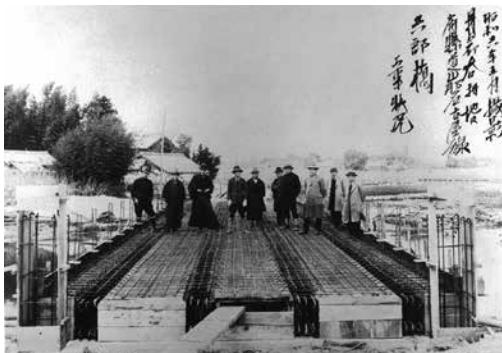


郷土おおぐち伝わる昔話のひとつ、「ろくん橋」は、現在の中小口地区内に架けられている橋、六部橋の建設にまつわるものです。

六部橋は現在、県道158号（小口名古屋線）に架けられている五条川を渡るための橋です。時代をさかのぼると、1841（天保12）年に描かれた小口村の村絵図では、現在とほぼ同じような位置に橋の表現があり、その横には「六部橋」と記されています。



五条川が今見る姿となつたのは、昭和20年代の改修工事によるもので、それ以前は場所によって川の流れが蛇行したり、川幅が違つていたりしていました。六部橋のあるあたりは、現在の川幅より広く、橋の長さも現在より長かつたそうです。



▲1931(昭和6)年に施工された六部橋の架け替え

昔話は、橋の名前にもなつた僧、六部の活躍が描かれています。この僧は橋の建設にまつわる昔話のために登場した徳の高い人物…と考えてしまいますが、実は本当に六部という僧がいて、小口村との縁を示すものがあります。

それは、六部橋のたもとにある石碑群の一つ、「六部回国供養碑」です。

そもそも「六部」は、「六十六部巡回國聖」のことで、法華經を66部書写し、時代によつて日本列島内の国数は違います。が、六十六=全国を廻り、各國の靈社靈仏に一部ずつ納経する巡礼僧のことを指します。

江戸時代、六部と呼ばれた僧たちが日本全国を廻つた際、村のお堂などで定住することもあったそうです。それを祈念して、村の住民は寄付を募



この五条川は、村を東西に、ちょうどふたつに分けるように流れどる。それにかけの橋は、村の中ほどにある中小口にかけるのがよからうと考えた六部は、万願寺のあたりに住みついた。

そして一。その日から村の衆に、「橋があつたら便利だぞ。」「みんなで橋をかけよまじか。」と、相談してまわった。しかし…。

「そりやあ、橋があれば、どれだけくらしがたすかるか。米を運ぶにも遠まわりせんでもええし、在所へいくにもはよけれる。だがな、米どりのこの村も、裕福なのは土地もちだけで、しもじものぐらしさ、どこのぐらにもおんなじ」とよ。かんじんなものがなない。」

そんでみんなはだまつとつた。

「うん、かけよまじか。」

と、返事ができぬいのあつやあをよんだ六部は、  
(よっしゃ、そんなりわしの力で何とかして  
かけてみよう。)

と、決心したのであった。

それからとこゝもの六部は、百姓のひよか道普請と、天氣のよい日は、ぜにかせぎ。雨の降る日は、小屋の中で橋の用材にノミをあてぬなどして眠る間もおしんで橋がけに精

り（勧進）、石碑を建てる）ことがありました。

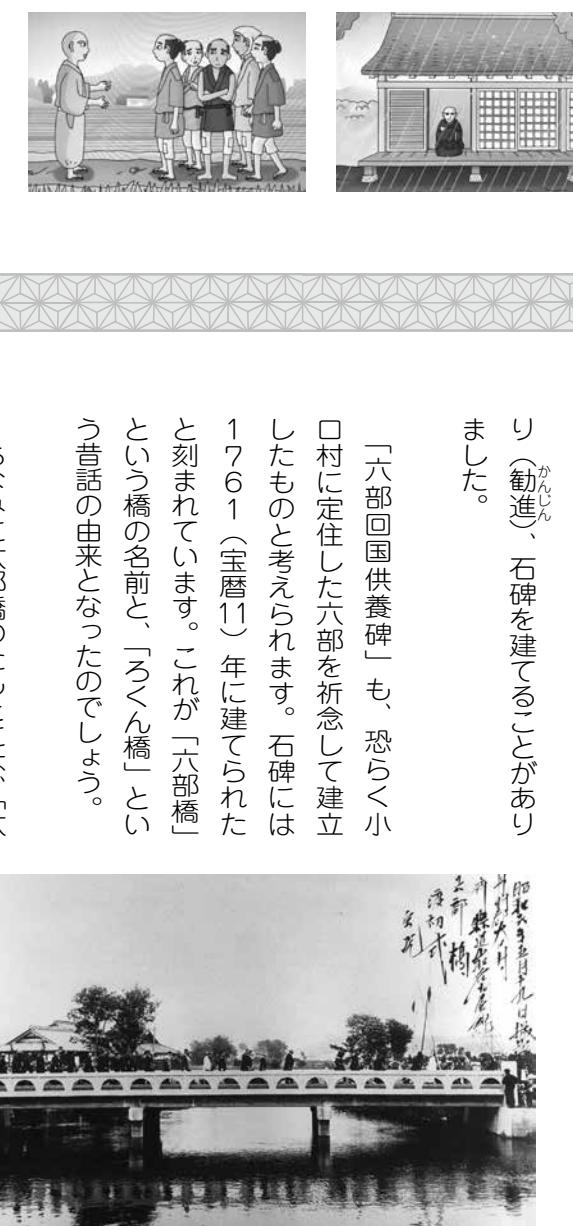
「六部回国供養碑」も、恐らく小口村に定住した六部を祈念して建立したものと考えられます。石碑には1761（宝暦11）年に建てられたと刻まれています。これが「六部橋」という橋の名前と、「さくらん橋」という昔話の由来となつたのでしよう。

ちなみに六部橋のたもとには、「六部回国供養碑」も含め、計4基の石碑が建つています。簡単に紹介すると、一番東側（正面右側）にあるのは「暴水流亡各靈墓」と表面に刻まれた石碑です。

これは1868（慶応4・明治元）年、梅雨前線の停滞による長雨により、入鹿池の水量が激増し、堤防が崩壊してしまいました。そこから溢れた濁流は尾張北部の村々を襲い、当時の記録によつて微妙に違いますが、大口町内でも約200名以上の犠牲者を出しました。これが「入鹿切れ」と呼ばれる大水害です。その際、中小口地内で犠牲者を供養するため施餓鬼が執りおこなわれ、「暴水流亡各靈墓」が建てられました。建てた場所は当初、荒井の堰だといわれており、ある時期に六部橋の西に移されました。

「暴水流亡各靈墓」の左にあるのは、表面に大きく「水神」と刻まれた石碑です。石碑自体も4基の中で一番大きいため、「入鹿切れ」の犠牲者を弔つたための石碑はこれだと勘違いされやすいです。この石碑は、1954（昭和29）年に五条川改修工事を記念して建てられました。その左に「六部回国供養碑」があります。

「六部回国供養碑」の左、4基ある石碑の一番西側（正面左側）にあるのは、



▲ 1931(昭和6)年に架け替えが完了した六部橋の渡初式

を出した。

その熱心さに打たれた村の衆は、たしなじくりの中から、ひとり、ふたりと手伝うものも出てきた。

六部は、それにはげまされてなお一層精をだした。

そうやって、八分どおり橋ができるがつたころだった。

ひょつとしたかぜひきがもとで、六部はねこんでしまった。

村の衆は、「はよようなれ。はよなおれよ。」と、いっ心に介抱したのだが…。

とうとうその完成をみずに死んでしまった。無理がたたつんじゃなあ。

村の衆は六部の志をあっぱれな」とと尊んでそのあとをつけ、力をあわせてついに橋をかけた。

こののち、中小口の導善といいう施主が、「奉納 大乗妙典六部回国供養」という石碑を建てて、毎年供養をして靈をなぐさめたといつてだ。



「水神」と刻まれた年代不詳の石碑です。1935（昭和10）年に刊行した『大口村誌』に掲載されている[写真]には、「暴水流亡各靈墓」とともに、六部橋の西に建っていることがわかります。この当時はまだ五条川改修工事がおこなわれた前でしたので、六部橋の西といつても正確な位置はわかりません。

小口村に定住した六部が由来の「ねぶん橋」。橋とともに六部のために建てられた石碑は、現在でも観ることができま

す。

「山姥物語」や「汗かき地蔵」と同じく、歴史民俗資料館では毎年、北保育園と連携し、「郷土を愛する心を育む活動」の一つとして、六部橋の4基の石碑をお散歩で観に行っています。遊戯室で聴いてもらうのは、「入鹿切れ」についてですが、お散歩では、「暴水流亡各靈墓」とともに、「六部回国供養碑」も観てもらいます。子どもたちは、普段何気なく通っている道にある石碑の由来を知り、驚いた様子を見せていました。

現在、大口町の魅力を発信するまちづくり団体、おおぐち宣伝部がプロデュースした「#大口町大好きフォトトラリー」が開催中です。六部橋の石碑群もフォトスポットの一つになっています。これまで紹介した徳林寺、長松寺とともに、ぜひ皆さん訪れてみてください。



北保育園園児が六部橋へお散歩に



▲六部橋の石碑群



▲#大口町大好き  
フォトトラリー  
詳しくはこちらから